

子どものコミュニケーション不全と想像力の低下

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 折川, 司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7152

子どものコミュニケーション不全と想像力の低下

折川 司

一 現代の子どもたちにもみるコミュニケーション不全

各方面から「子ども」たちのコミュニケーション不全」が指摘されて久しい。

文化審議会は、平成十五年八月に「国語教育等小委員会の意見のまとめ」を示した。この答申においては、国語の力を向上させ、安定した情緒を身につけていく上で、特に幼児期・児童期における親と子のコミュニケーションの重要性が強調されている。幼児期や児童期における家庭内コミュニケーションという一見ごく当たり前のような行為の強調は、換言すると、当たり前前と想っている親と子のコミュニケーションという行為すら、実は我が国の日常生活から抜け落ち始めていることの悲痛な指摘であるとも捉えることができる。

国語教育は、こうしたコミュニケーション不全の状況や子どもたちのコミュニケーション力の低下に対処するために、様々

な実践的な手だてを講じてきた。ここ十年あまりをみると、音声言語重視の方針や伝え合う力育成への学習指導のシフトが、そうした方向性に共鳴したものであったと言えよう。しかし、そうした動きにもかかわらず、今一つ明確な成果が上がらず、今もなお、多くの義務教育学校がコミュニケーション力の育成を教育目標や研究目標に掲げ続けなければならないのは、一体なぜなのだろうか。

近年では、コミュニケーション不全の状況を打開するということをねらいの一つとして、小学校課程に英語教育を必修化しようとする動きも持ち上がってきている。日本語を学び、日本語によって生まれる繊細な感性や確かな思考力の基礎を築いていかなければならない児童期に、あえて外国語教育を行う意義については、識者の間でも、現場教員の間でも大きく意見が分かれるところであるが、その問題を横に置いておいても、コミ

ユニケーションの不全状況の改善に向けての英語教育導入に關してはもつと丁寧に検討すべきではないだろうかという思いは拭えない。というのは、子どもたちの間でコミュニケーション不全が起きている原因を分析・共有することなく英語教育導入を進めても、国語教育が音声言語へ大きく学びをシフトしたときのように不完全燃焼で終わることが予想できるからである。

本稿においては、まず日本の子どもたちのコミュニケーション不全の現状をいくつか提示し、こうした状況と、その根底に横たわる想像力の低下について考察していく。そして、コミュニケーション不全を改善する一つの策として、家庭読書を充実させることの重要性について述べていく。

二 時代と共に変化するコミュニケーション不全因子

(1) 対立や摩擦を避け始めた一九七〇から八〇年代前半

日本の子どもたちはコミュニケーション不全やコミュニケーション力の低下という状況に常に直面してきた。しかし、誤解してならないのは、コミュニケーション不全という状況は同じであつても、そうした事態を引き出す因子は時代よつて微妙に異なつてゐるということである。七〇年代や八〇年代前半にかけてと、八〇年代後半から九〇年代にかけての不全状況をつくり出す因子には、もちろん重複する部分もみられるが、明らか

な違いがある。当然、九〇年代の不全状況を構成している因子だけでは、現在の不全状況もまた十分説明することはできない。

桜井哲夫は、「あいまいな人間関係やあいまいな『言葉』を許さないという全共闘運動が暴力的なテロリズムへと自己解体していった後、社会を支配したのは、対立に対する極度の恐怖感だつたのではなかっただろうか。」と述べ、七〇年代・八〇年代の子どもたちが対立や摩擦を避けるために意図的にコミュニケーションの回路を断ち切つてしまわざるを得なかつた社会的状況を説明している。

桜井はまた、「対立」を生まないコミュニケーションの世界に、人々の信ずべき価値が生みだされるはずもない。おそらく、日本語のコミュニケーション様式はかつてないほど奇妙なものとなつた。どのような言語といえども、たとえあいまいな意味関連の日本語でさえ、「対立」こそがひとつの価値＝意味を生み出すはずである。にもかかわらず、運動の敗北の後の虚脱感のなかで、『言葉』への不信をときぞすましていった若者たちだけでなく、日本の社会全体のなかに「対立」を排除しようとする傾向が一般化していった。」とも述べている。確かに、「対立」を回避・排除するための方策として、「人に迷惑をかけない」ということが一つの大きな価値としてこの時期急速に拡大したことは否めないであろうし、そうした傾向はバブル期を経

て現代にまでゆるやかに位置付いている。面倒や採め事に出会わないために他人に深入りしないという、今や子どもにとつて当たり前のスタンダードからは、他者との「程良い距離」が少しずつ開いてきたと言ふことを読み取ることが出来る。

(2) 他人が視野に入らない八〇年代後半から九〇年代

八〇年代後半から九〇年代にかけての不全状況については、中島梓が興味深い指摘をしている。中島はコミュニケーション不全を決して異常事態などではなく、現代社会を生きていく上で編み出された「適応のための不適応」であると述べ、自らの体験から「コミュニケーション不全症候群」に属する人々の特徴を三点挙げている。²⁾

- 一、他人のことが考えられない、つまり想像力の欠如。
- 二、知り合いになるとそれがまったく変わってしまう。つまり自分の視野に入ってくる人間しか「人間」として認められない。

三、さまざまな不適応の形があるが、基本的にそれはすべて人間関係に対する適応過剰ないし適応不能、つまり岸田秀のいうところの対人知覚障害として発現する。

中島の述べるコミュニケーション不全には、桜井哲夫が示した意図的な「対立の排除」という要素はない。自他双方のこと

を考へて他者と距離をとることによつてコミュニケーションが停滞するという七〇年代や八〇年代前半の様相はなく、他人のことが見えない、感じられないことによつて不全状況が生み出されるといふ点が九〇年代の特徴と言える。まわりの人間をあたかも無色透明な空気と同じように認識できないというのは、例えば「ラッシュの乗り物のなかでは、まったくがいにあいてを何者であるとも知らない同士が、恋人同士よりも密着して何十分なり何時間をおくらざるを得ない。」³⁾という極めて異常なこの時代に順応するための意味、適応機制であつたのかもしれない。

三 現代の子どもたちのコミュニケーション不全

(1) 思いをやりとりすることを苦手とする子どもたち

次に、現代の子どもたちのコミュニケーション不全を整理したい。

子どもたちは何事にも興味津々で、新しい知識や珍しいものに目を輝かせて興味を示すものだという認識は、今や過去のものにならうとしている。近年は自分以外のモノ・コトにほとんど関心をもたない子どもの増加が懸念されている。彼らは自分へのまなざししか持ち合わせておらず、目の前の人間(当然視界に入っている)を見ないのである。他者と距離をとつていた

七〇年代、他者が見えなかつた九〇年代とはまた異なるコミュニケーション不全と言えるであろう。

他者と距離があるわけではなく、他者を認識することもできるが、目の前の他者をあえて見ない、例えば次のような事例に心当たりはないであろうか。

例1 若者の会話にみられる独り言の応酬

若者たちの活発な「会話」に耳を傾けると「つてゆうかぁ…」「つーかさぁ…」という言葉が頻繁に飛び込んでくる。彼らは、こうした言葉をあえて文頭に置いて、くり返し使用している。

本来「つていうか」という言葉は、「自分の言葉をあれこれ吟味してよりよい表現を探すときに用いるもの」と位置づけられている。しかし、若者たちの会話に登場する「つてゆうかぁ…」や「つーかさぁ…」は、北原保雄編『問題な日本語』によると「言葉を吟味しているというより、相手とは言いたい内容が異なっているということ、つまり『あなたの言いたいことはともかく、私の言うことを聞いて』という気持ちを表している」言葉ということができるようである。

つまり、この言葉を用いることによって話を自分から中断させ、リセットできるということになる。文頭に置いてあるからといって、相手が話している内容を受けとめて、さらに話を継

ぐために使っているのではなく、相手の話を強引に断ち切り、新たに自分が話の主導権を握るためのカードとして利用されているのである。

とり方によっては非常に便利な一言である。しかし、「つてゆうかぁ」という言葉が交互にくり返し放たれることによって、会話が幾度もリセットされ、自分の言いたいことの応酬になる。

若者の会話を聞いていると、まったく脈絡がなく、つながりを欠いているものが珍しくないが、それは自分の都合に合わせて相手の言葉を断ち切っているからに他ならないのである。若者たちの間には確かに言葉が行き交ってはいるが、それはダイアログとしての開かれた言葉ではなく、単なる独り言ではない。こうした〈会話もどき〉〈コミュニケーションもどき〉からは、言葉のやりとりによって自己と他者との間で共有するものが少しずつ拡充していくという豊かさや可能性は見いだせない。

こうした事態は電子メールによるやりとりにも当てはまることかも知れない。¹⁵⁾

例2 みんなでゲームをやるという独り遊び

近年、子どもたちが他者と直接的に関わって遊ぶ機会は随分少なくなつたようである。塾や習い事に行かなければならず、

友達と遊ぶ時間が作り出せない。また、屋外で安心して遊べる場所がないといった物理的な諸事情も背景にはあるが、たとえ遊ぶ機会が生まれても、そこでは生身の人と人とがふれ合い、ぶつかり合うやりとりがなかなか見られない。

例えば、小学生が「今日は友達とゲームしてくる」と言ってお出掛けていく。しかし、「友達と関わり合つて、みんなで楽しむ」という展開はまず期待できない。ゲームをやる子、漫画を読んでゲームの順番待ちをする子という棲み分けがあり、子どもと子どもの間には厳然とした高い垣根が築かれている。隣に座つている子がどのような名前であり、どのようなことに興味をもつており、どのような性格なのかといったことには関心を寄せない。誤解を恐れずに言えば、ネットで志願者を募つて集団自殺をする若者の心理に近いものとも言つてことができるかもしれない。自分の目的を遂行したいという思いと、みんなと一緒にいたいと不安という思いをもつてはいるが、場所と時間を共有し、同じ目的をもつ隣の人のことには別に関心がなく、という奇妙な関係である。つまり極端な話、今ゲームに取り組んでいる子、隣に座っている子は誰だつて良いのである。最近の子どもたちにとつて、「友達と一緒に遊ぶ」ということは、「その場、その時間をただ共有する」ということと同義となつてしまつているのかもしれない。

子どもたちの関心は専ら自分のゲームの順番がいつ来るかというのとゲームのスコアに集中する。

例3 一言も発しないコンビニでの買い物

コンビニエンスストアにしてもスーパーマーケットにしても、店員と客との会話は非常に限られている（地域によつて違いはあるだろうが）。多くの客は終始無言である。しかし、たとえ無言であつても買い物にはなんら不都合はない。言葉を発するのは店員ばかりであり、発せられた声に客は無関心である。

「こんにちは。いらっしゃいませ。」

「お弁当は温めますか。」

「お箸はおつけしますか。」

「お会計は八六〇円になります。」

「大きい方から一、二、三、四、四千円。細かいのは一四〇円になります。」

「ありがとうございます。」

右の発話は、あるコンビニエンスストアにおいてレジ係の店員と高校生くらいの男性客との間に展開されたものである。一読して分かるのとおり、すべて店員の声である。店員が客に話しかけている間中、客は二度ほどうなずいただけで、音声による反応はない。

もちろん店員も客に応答を期待しているわけではない。

「こんにちは。いらっしやいませ。」

「こんにちは。いやあ、暑いねえ。今日は何が売れてるんだい？」

「お弁当は温めますか。」

「うん、頼むよ。キミの温め方っていつも最高だよね。」

などという返答が、もし客の高校生から返ってきたら店員はとまどうであろう。客と目を合わせることもない店員の発話もまた客という他者に関心のない極めて儀礼的な慣習にすぎないのである。

(2) 「語らぬ文化」とは根本的に外れた現代の子ども

以上のような事例にみられる子どもたちには足りないものは何であろうか。それは他者と向き合う言葉であり、言葉の産出を支える豊かな想像力である。国語教育において十数年前に行われた音声言語重視という画期的な学びのシフトが、コミュニケーション力の向上という点において教育現場でうまく機能しなかったのは、音声言語に関する技術的な指導や発話体験に目が向きすぎ、「豊かな想像力を育て、他者への関心を高める」という基礎的な部分が疎かになったためではなかったか。

現代の子どもたちは言葉を発しなくとも外の世界とコミュニケーションできてきているかのように見える。しかし、事例に示したように、それは言葉らしきものが頭の上を行ったり来たりしてい

るだけであって、いわば「コミュニケーションもどき」である。行き交うのは別に言葉でなくともよく、サル語でもカエル語でも何でもよい。子どもたちは「言葉を語らぬ」という状況にどっぷり浸っており、そこには想像力によって他者に寄り添い、関心を寄せ、向き合うという姿勢はない。

元来日本人は、「語らぬ文化」を大切にして、その中で生きてきた。「語らぬ文化」とは、言葉を多用しなくてもスムーズにコミュニケーションできる文化的な土壌のことである。

こうした日本に古くからある「語らぬ状況」と現在の子どもたちの「語らぬ状況」とは根本的に異なるものである。両者にある違い——それは心の豊かさを作り出す想像力の有無ではないだろうか。

(3) 「語らぬ文化」〈察する文化〉と想像力

戦前の日本は、言葉によるやりとりを前面に出さずとも田滑なコミュニケーションが成立する社会であった。無論のこと、音声言語が貧弱であったというわけでも、江戸や明治期の人々のコミュニケーション力が低かったというわけでもない。低いどころか、逆に現代と比較すると非常に豊かなコミュニケーションの状況を築いていたと推察できる。想像力が豊かで、言葉によってもしつかりコミュニケーションをとることができ、周

りや相手に関心を寄せ、思いやることができたら成り立つていた戦前の文化的土壌。その一端は、以心伝心や腹芸、江戸しぐさといったものが庶民生活の各所に当たり前のよう位置づいていたことからもうかがい知ることができよう。こうしたノンバーバルなやりとりは、音声言語による直接的なコミュニケーションと豊かな想像力が個々人の中にしっかりと根付いていてこそ機能するものであることは想像に難くない。

たとえば、江戸期の粋な仕草や良い格好の代表例として取り上げられる江戸しぐさは、お互いが、気分良く時を共有するための知恵として「語るぬ文化」をよく表した行為であると言われている。一部現代風にアレンジしていくつか示してみたい。

○雨が降っている。細い路地で人とすれ違う。どちらからともなく傘を傾げる。

○青信号で交差点の横断歩道を渡っている。曲がつてくる車がある。小走りになる。

○人の前を通り抜ける。手を挙げて、少し腰をかかめる。

○三人掛けの座席に何とか四人目を座らせようと皆が腰をずらす。

これらの行為の土台には、言葉以外の部分で相手のことを酌

み取ることを大切にする細やかな思い（氣遣い・思いやり）がある。相手の思いや置かれている状況を想像し、それを受けて「こうじゃないかな」「こんな思いかな」「ありがとう」「ちよつとごめんよ」「すみませんね」という内なる言葉が行為という形で表出されるのである。想像力によるこうした他者への氣遣い、つまり「察する文化」は、現代の子どもたちが作り出している「コミュニケーションもどき」にはみることができない。現代の子どもたちに欠落しているのは、コミュニケーションの技能や経験ではなく、その土台となる想像力なのではなからうか。

四 子どもたちにもみられる想像力の低下

（一） 形象をイメージ化できない子どもたちの増加
では次に、子どもたちの想像力の現状について、いくつか事例をあげながら示していきたい。

小学校の国語教科書には色鮮やかな挿絵がついた物語教材が数多く掲載されている。学校教育入門期の一年生の教科書の場合、最初の数頁は絵を中心とした「物語教材」が並び、その後次第に文字言語の学習を意識した教材が増えてくる。

一年生の子どものほとんどは、こうした教材群を、登場人物に同化することによって読んでいく。朝の教室の様子が描かれている挿絵⁷を見た子は、「きつとこの子（挿絵で描かれ

た子ども)は、お友だちに昨日うちであつたことを話しているんだよ。」と物語に寄り添い、また穴の中に落ちてしまった「ろくべえ」^⑤に向かつて「ああつ、たいへん。がんばれ。」と自然に叫ぶ。物語に触れている子どもたちの頭の中では、豊かなイメージ化が行われているのである。

しかし、こうしたイメージ化をすることが困難な子どもが少しずつ増えているような気がするのには思い過ぎ^⑥しだらうか。

例えば、二年生の「お手紙」^⑦の授業において「がまくんは、このとき、どんな気分なのか。」という先生の問いかけに、首をかしげればかりの子どもがいる。「がまくんは悲しいのかな。」と問いを易しくしても同様の反応が返ってくる。

これは一つの例ではあるが、近年の国語教室においては決して特殊なことではない。右の事例(静岡県浜松市)に類するやりとりは、全国のあちこちらで見受けられる教室の姿である。他にも、物語の絵を描かせると人物が無表情であつたり、吹き出しを書かせると何も書けなかつたりもする。

(2)「僕は何をすればよいですか」という質問の増加

「次やるべきことがイメージできない子が増えた」ということも学校教育現場において、嘆かれていることの一つである。「次が思い浮かばない」「言われたことしかやれない」「全てお

膳立てしてあげないと動けない」という子どもの増加である。

例えば、給食を早く食べ終わつた子が教師のところに行つてきて、「早く食べ終わりました。どうすればよいですか。」と質問する。そうした局面においては、教師なら当然「どうすればよいと思いますか。」と逆に問い返して考えさせるようにするだろうが、食事中に教室内で野球やサッカーをやつてよいわけはなく、常識的に考えれば何をして過ごせばよいかなど瞬時に分かりそうなものである。

図画工作の学習中、「ぼくは何を作ればよいですか。」と尋ねてくる子がいたり、授業終末時に「来週、ぼくは何をもつてくれればよいですか。」と教師に質問する子がいたりする。

また、「それをやつたらどうなるか」が想像できない子どもも多い。校舎の二階から机を投げ落としたらどうなるか。コンビニエンスストアの前に多人数で座り込んでいたらどうなるか。電車の中で床に座り込んで化粧をするという行為はどうか。大学生に対しても、なぜ授業中に飲食や携帯メールや私語を慎まなければならぬかをくり返し語り聞かせないといけないとは困つた事態であるが、それが現実である。

「時代が変わつたんだよ」とあえて無視することも、幼稚の一言で笑つて済ますこともできるだろうが、その根幹には想像力の欠落や未成熟さがあるということは否定できないであらう。

う。これでは人を思いやったり、心を察したりすることは難しい。

こうしたことが未熟なコミュニケーションの原因であろう。

五 コミュニケーション不全の改善と読書

(1) 不読者の割合とコミュニケーションの現状

国語教育という枠組みを意識した場合、子どもたちの想像力を育てていく最も身近で有効な手段の一つが読書であることに疑問を挟む余地はない。

二〇〇六年度版『読書世論調査』^⑩によると、「一カ月間に一冊も本を読まなかった児童・生徒の割合」は左の表のようになる。小学生の場合、ほとんどすべての子どもが読書を行っており、不読者はわずか約六パーセントである。言い換えると、九四パーセントの子どもが何かしらの活字本に触れていることになり、これは実に喜ばしいことである。

幾度となく本の世界に浸った経験は子どもたちの想像力や語彙を次第に豊かなものにし、コミュニケーション不全改善の一助となるであろう。また読書によって子どもたちの前頭前野は多くの刺激を受け、キレる子どもも減少したに違いない。

	H.7	H.17
小学生	15.5%	5.9%
中学生	46.7%	24.6%
高校生	61.3%	50.7%

1カ月に1冊も本を読まなかった児童・生徒の割合

しかし、現実はどうか。無論、読書が短期間でドラスティックな効果をもたらすとは思っていない。しかし、十年前から不読者の割合が比較的低かったにもかかわらず、先に挙げた事例が物語っているように、危機的な状況は年を経るにつれて少しずつ改善されているように思えない。逆に想像力の低下やコミュニケーション不全の状況は悪くなりつつある。

多くの子どもたちが本に親しんでいるにもかかわらず、子どもたちの一部に豊かな想像力が根付かない理由はといえば、それは子どもたちが手に取っている本に原因の一端があるように思えてならない。

先述の『読書世論調査』に掲載されている男子小学生（四〜六年）が好んで読む本をみると、『日本の歴史』と『三国志』が圧倒的に多い。これらは文章によって構成された書籍ではなく、いわゆる「学習漫画」^⑪というものである。

小学校六年生（男子）では、人気図書の第一位から第三位までをこうした学習漫画が占めている。無論、学習漫画が想像力を引き出さないなどは決して言うつもりはない。しかし、絵の連続と吹き出しというかなり直接的なメッセージによって、外側からある程度イメージ作りのお膳立てをしてやらなければならぬという本とのつきあい方に軸足を置いている子どもたちの読書生活は少しずつ改善する必要があるだろう。また、これ

は全国学校図書館協議会がいくら読書量の成果を声高に叫んでも、現場の教師や司書、保護者らが心から喜ぶ気にはなれないというのはよく分かる。

(2) 子に読み聞かせ、親子で語り合うことの重要性

こうした実態をふまえ、家庭は子どもの読書（活字読書）にもう一度しっかりと目を向けていく必要があるだろう。それも子どもが幼い時期から真剣に考えていくべきである。

しかし初めから、ただ親が本を買い与えるだけでは、子どもが想像力を駆使し、また想像力を豊かにしながら本の世界に浸ることは当然難しい。となると、幼児期から児童期の子どもに對しては、読み聞かせが重要となるであろうし、本の内容や挿絵について語り合う時間もまた不可欠である。村上淳子が指摘するように、こうした読書経験の積み重ねは青年期に入っても同じなのかもしれない。¹⁹⁾

想像力が不足しているからと言って、アニメのDVD「ばかり」に安易に子守をさせたり、漫画を買い与えて「ばかり」いたりしては、いつまでたつても気遣いや思いやりを引き出す真の想像力はつかないのではないか。

特別なことを家庭に要求しているのではない。まずは子どもたちが本に気軽に触れられる機会をつくり、たくさん読み聞か

せ、語り合うことが必要なのである。

その際、もし実践上の不安（方法面・経済面等）があれば、地域図書館や子ども文庫の各種プログラムや施設を積極的に活用すればよい。特に、地域図書館は魅力的な読書プログラムで満載であるし、司書が家庭読書の個別相談にも応じてくれるはずである。

例えば、金沢市立の各図書館においては、

○おはなし会

○キッズシアター

○子ども向け劇

○おはなし出てこい

など、子どもたちが本の世界に親しみ、想像力を伸ばしていくことができる様々な定期プログラムが数多く用意されている。また、キッズフロアーや児童図書館（平和町）も充実している。さらに平成一九年度内の開館に向けて、「子ども図書館（仮称）」の建設整備も進んでいる。こうした各種プログラムや施設は子どもにとつても非常に魅力的であり、本に親しむきっかけづくりとして最適である。これらのプログラムを有効に利用しながら、読み聞かせや語り合いを通して、家庭の中にも子どもたちの読書生活を少しずつ根付かせていくのである。

子どもたちの読書経験を豊かにし、想像力や語彙を育て、彼

らのコミュニケーションが健全に機能できるように支援していることが今家庭にも求められている。

注及び引用文献

- (1) 今回は「子ども」を幼児期から青年期までを包括する用語として使用している。文章中、「若者」という表現をいくつか用いたが、同義のものとして位置づけている。また、「幼児期」「児童期」「青年期」の区分については、『教育・臨床心理学中辞典』（北大路書房・二〇〇〇）に準じた。

- (2) 桜井哲夫『ことはを失った若者たち』講談社、一九八五、一一〇頁
- (3) 同右、一一二頁
- (4) 中島梓『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房、一九九一、二九頁
- (5) 同右、二四頁
- (6) 高橋裕子「ケータイ・ネットと高校生の意識についてのアンケート」『季刊セクシユアリティ』二七号、エイデル研究所、二〇〇六
- (7) 平成一七年度版光村図書国語教科書一年（上）
- (8) 灰谷健次郎「ろくべえまってるよ」平成一七年度版学校

図書国語教科書一年（下）所収

- (9) アーノルド・ローベル「お手紙」平成一七年度版光村図書国語教科書二年（下）所収
- (10) 『読書世論調査二〇〇六年版』毎日新聞東京本社広告局、二〇〇六
- (11) 学習漫画は、絵が主体となっているため親しみやすく、内容理解を容易にするという利点がある。また、歴史等の学習への興味づけにおいて効果的である。
- (12) 村上淳子「本を読んで甲子園へいこう！」ポプラ社、二〇〇〇

参考文献

- (1) 荒木創造『ニートの心理学』小学館、二〇〇五
- (2) 寺沢宏次「子どもの脳に生きる力を」オフィス・エム、二〇〇一
- (3) 久保田競「楽しく読むことが最高の読書法」『灯台』五四一号、第三文明社、二〇〇五、二二―二五頁
- (4) 川島隆太「読み聞かせ・読書で脳は活性化する」『灯台』五四一号、第三文明社、二〇〇五、二六―二七頁
- (5) 江戸の良さを見なおす会『江戸しぐさ講』新風社、二〇〇五（本学教員）